

2020年(令和2年)4月14日

関係者各位

中京大学学長 安村仁志

緊急事態宣言発出に伴う新型コロナウイルス感染症対応に関する本学の方針

新型コロナウイルス感染症が全世界で猛威を振るい、累計感染者数が185万人に上っています。我が国でも1年半ばに最初の症例が報告されて以来拡がり始め、最近では急速に感染者が増え、7,000人を超えています。不安が広がるとともに、経済活動にも大きな影響が出ており、政府は9日に《緊急事態宣言》を発出しました。愛知県でも感染者増加に基づき、10日独自に同宣言を出し、小・中・高校は当面5月初旬まで休校が続きます。

大学でも全国的に感染者が出始め、本学でも先週、海外からの帰国者1名に感染が確認されました。さいわい、帰国後大学構内には立ち入っていないことが確認されておりますが、注意を必要としています。

こうした状況の中で、本学は2月に対策本部(本部長：学長)を設置し、2019年度卒業式の対応から新年度をいかに迎えるかまでさまざまな対策を検討し、教職員のご理解を得ながら、感染防止に努めてまいりました。状況が日々変わっていくなかで、学生・教職員の健康・安全を最優先にしつつ、新学期をいつからどのように始めるか具体的な対応を模索しました。その際、①感染者が出ないようにすること、②国で定められている教育課程基準(1学期15回)を確保すること、③人を大事にして教育することをモットーとする大学として、最大限の感染防止策を講じながら可能な限り《対面型授業》を維持することを前提にしました。その結果、一旦、授業開始日を5月7日に延期し、11回の対面型授業を確保し、残る4回の授業についてはオンライン(遠隔型)授業や補講で行う方針を立てました。しかし、《緊急事態宣言》が出るに至りましたので、通学時の感染リスクをも考慮してやむなく方針を変更し、春学期(5月7日開講は変えず)の授業は原則オンライン(遠隔型)授業で行うことにいたしました。これは、学生・教職員の安全を最優先した苦渋の選択です。

これに伴い、大学は授業展開において大きなチャレンジを受けます。教員はすでに作成している授業計画(シラバス)を遠隔授業用に大なり小なり変更しなければならなくなります。授業内容を遠隔授業に合わせていかに学生の皆さんに示し、的確な課題を出して反応を求め、確実な成績評価に結び付けていくか、授業全体を組み立て直さなければなりません。本学には《MaNaBo》

という遠隔授業支援システムがありますので、それをベースに新たな可能性を求めるとともに、さらなる充実をはかるようにいたします。教員も学生もそれぞれがそれらを最大限に活用し、教育の質を保証する授業が実現するよう、力を合わせていきたいと願っています。

出校しない形のみでの授業はこれまで経験したことがないことです。今日の世界ではネットの活用が普及していますが、それには功罪があると言われていいます。便利ではあっても、人と人が顔を合わせて学んだり働いたりすることが損なわれるのではないかとの危惧です。それだけに、何とか対面型授業を維持しながら乗り切ろうと模索しましたが、何よりも人命が大事との思いで濃厚接触を避ける今回の決断をいたしました。早く終息し、本来のにぎやかなキャンパス・活発な対面型授業が戻ることを望むばかりです。

人類はこれまで何度も各種の感染症に遭遇し、その都度チャレンジを受けてきました。今回も乗り越えなければならない《試練》です。試練は、われわれ自身が《試される》とともに《練られる》ことであります。本学も力の出どころと受けとめ、対応して参ります。人間は《食べ》なければなりません。その《食べる》ということでは、まず食を得るため働かねばなりませんので、それを維持するための経済活動も大事です。しかし、それは生命・いのちあつてのことを忘れてはなりません。いのちを大事に考え、行動してまいりたいと思います。教育は、《ひとを育てる》が根本です。本学は、建学の精神の4大綱《ルールを守る・ベストを尽くす・チームワークをつくる・相手に敬意をもつ》および教育目標《自ら考え 行動できる しなやかな知識人の育成》を堅持し、全構成員を挙げて乗り切っていきたいと存じます。